

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

東北各地で初雪が観測され、東日本大震災後、7度目の冬を迎えようとしています。2017年10月末現在、岩手・宮城・福島3県では、建設型応急仮設住宅に、前年同期比で約2万5,200人減少したものの、いまだ1万6,000人以上が入居しています。熊本地震の被災地においても、1万人以上が仮設での暮らしを余儀なくされています。1日でも早く落ち着いた生活が送れるようになることを願うばかりです。今回は、石巻ベースの活動を通して、人が人を想う心のリレーによって生まれた「石巻から世界の海へ」プロジェクト、いわき教会チーム平・堂根が薄磯団地（災害公営住宅）自治会初のイベントへ参加・協力した様子、石巻ベースの秋の遠足についてご紹介します。

石巻から世界の海へ——毛糸の帽子プロジェクト

カリタス石巻ベース 内原 わさ

カトリック戸塚教会からのご提案により「遠洋航海の外国船の『船員さん』たちにクリスマスプレゼントとして、毛糸の帽子を」という「石巻から世界の海へ」プロジェクトが石巻ベースで始まったのは、7月初旬のことでした。

カトリック戸塚教会とカリタス石巻ベースのつながりは、震災後2015年9月から始まりました。2017年の現在に至るまで、戸塚教会では、毎月、数名のボランティアさんを「戸塚お茶っこ隊」として派遣してくださり、同時に、手作りケーキも贈り続けてくださっています。この手作りケーキは、健康上、または高齢などのために、実際に石巻へ来ることが難しい方々が、「ケーキ隊」として石巻の被災者のために手作りしてくださっているものです。



あるとき、利用者さんと、このプロ級のおいしいケーキをいただきながら「何かお礼ができたらいいわね」という話が持ち上がりました。「私たちは編み物だったらできるよ!」という声に、「コースターかアクリルたわしを編んでケーキ隊の人たちに送ってはどうかしら?」と話が盛り上がりました。それを聞いた戸塚教会の方々は、とても喜んでくださり、早速、ボランティア隊で話し合ってくださいした結果、「それなら教会が関わっているAOSに協力してくださったらケーキ隊の人たちも喜びます」とのご返事をいただきました。

AOS (Apostleship of the Sea 船員司牧)とは、船員さんたちを対象にしたカトリック教会の世界的組織です。世界各国の港で、停泊した船を訪問、歓迎し、福利厚生や心のケアを目的とした船員さんたちへの奉仕活動を行っています。

陸で生活している私たちは、「船員」と聞いても遠い存在のように感じますが、海外から輸入される生活物資の99%が、海路で輸入されています。四方を海で囲まれた日本で暮らす私たちの生活は、「船員さんたちの働き」に支えられているのです。

横浜港は、日本有数の大きい港。戸塚教会の方々は、AOS 横浜として、年末年始でも国に帰ることができない船員さんたちに感謝の気持ちを伝えるため、クリスマスに毛糸の帽子やカレンダーの贈り物をしています。寒い冬を船上で過ごす船員さんたちにとって、毛糸の帽子は、最高のプレゼントになります。

利用者さんたちに、このプロジェクトについてお話しすると「喜んで編ませていただきます!」ということでした。石巻の人たちは、「船員さん」という言葉を聞くと、とても身近に感じます。それは、ここに集まる被災者の方々の中にも、家族の中に船乗りをしていた人たちが多く、冬の厳しさを知っている人たちだからです。

戸塚教会では、すぐに呼びかけをして毛糸を集め、送っていただきました。石巻の私たちも楽しみに待っていましたので、毛糸が到着するとすぐに取りかかりました。編み物のベテランさんで船主の奥さんから、「船に乗る時の帽子は、明るく目立つ色のものが良いよ。事故等があった時、見つけてもらいやすいから」というアドバイスがあり、みんなで見本を見ながら「この色とこの色を組み合わせで…」などと言いながら色合いを決め、編み始めました。

初めは一日に1枚のペースでしたが、慣れてくると一日に2枚編み上げる人も出てきました。編み物はプロ級の人たちなので、隣のテーブルの会話を聞き、おもしろい話をしていると一緒に笑い、自分たちも話をしながら手は止まることなく編み続けます。楽しそうに編んでいるのを見たボランティアさんの中には「自分も編みたい!教えて」と教わりながら一緒に編んでいる人もいました。

11月に、出来上がった63枚を戸塚教会へ送ります。利用者さんやボランティア、スタッフが心を込めて編んだ帽子が、厳しい寒さの中、船上で働く船員さんたちを包み、少しでも暖かさを味わっていただくことができれば、それが私たちの大きな喜びです。船員さんたちのご健康を心よりお祈りしつつ…。



～カトリック戸塚教会より～



戸塚教会に石巻ベースから無事、毛糸の帽子が届きました!

11月26日、ベースから送っていただいた帽子は、戸塚教会で有志が編んだ帽子とともに、横浜末吉町教会のAOS本部に届け、大変喜ばれました。帽子は、12月初旬、船員さんたちにプレゼントされる予定です。



*写真は、カトリック戸塚教会よりご提供いただきました。
ありがとうございます。

彼らのフレッシュなサービスぶりが、マロンケーキやお団子のおいしさをいっそう引き立ててくれたことでしょう。

この日の目玉の一つとして、佐伯自治会長さんによるセミプロ級のギターの弾き語りがありました。ボランティアの大学生たちからも、大きな拍手が起こり、ご自身で作詞作曲された「薄磯ものがたり」でアンコールに応え、少しはにかみながら退場されました。



写真上：お楽しみ抽選会の景品準備
写真下左：芋煮やお団子を味わう参加者たち
写真下右：佐伯自治会長さんによるギターの弾き語り

そして、なんといっても圧巻だったのは、地元にも古くから伝わる海の神さま「安波（あんば）さまの唄」を、ご婦人たちがそれはそれは力強く唄われたことです。唄は何番も続きますが、終わりには「そりゃよいよいよいやね」が繰り返され、次第に私たちも手拍子とともに、唱和していました。そのほか「かぞえ唄」「とりごやの唄」などが唄われ、どれも温かい故郷の唄で、良き薄磯の風習や歴史を感じるひとときとなりました。

最後に、自治会長さんからご要望のあったチーム平・堂根の恒例イベントの「お楽しみ抽選会」が行われました。学生さんも巻き込んで、手編みのセーター、リュック、しゃぶしゃぶ鍋、Gジャン、ギター、バッグ等々、準備した120個の景品が誰かに当たるごとに歓声が上がり、大いに盛り上がり、芋煮会は閉会となりました。

震災後6年目の昨年あたりから、薄磯でも高台移転が一軒、また一軒と具体化してきたようです。経済的負担のあるなか、どのくらいの方が移られるのでしょうか。津波によりお一人になられたお年寄りも、この団地に残られるでしょう。私たち平・堂根の開くサロンを楽しみに待っていてくださる方々と共に、できるかぎりサロンを開き続けたいと願っております。



(写真上)
故郷の唄をこころ一つにして唄い、楽しませていました。



(写真下)
「お楽しみ抽選会」
どんな景品が当たるか、ドキドキわくわくの時間

*写真は、立教大学よりご提供いただきました。ありがとうございます。

薄磯団地 芋煮会

カトリックいわき教会 チーム平・堂根 佐々木三代子

ある日、私たちチーム平・堂根は、ボランティア先の1つである薄磯団地自治会長さんから、芋煮会共催のお誘いを受けました。薄磯団地自治会初のイベントとお聞きし、一同喜んで参加を決めました。

いわき市薄磯地区は、先の東日本大震災の折、市内最大の津波被災地となった集落です。震災後3年目から災害公営住宅への入居が始まりましたが、各地の避難先から戻られた多くは、ご年配の方たちで、110世帯余りが落ち着かれました。

この大変な薄磯の方たちに寄り添っていきたくと団地集会所で始めた当初の平・堂根サロンには、ほんの7～8名の方が参加されるくらいでした。どうなることかと案じていましたが、段々と気持ちに通じるようになり、皆さんが楽しみにお集まりくださり、今日では、約40名の方をお迎えするサロンになっております。



大鍋での芋煮作り



野菜たっぷりで見た目にも美味しい芋煮

10月29日、芋煮会当日は、あいにく、台風22号の接近で、大雨が降りしきり中でのイベントとなりましたが、駐車場に準備された大テント二張りの中には、区長さんはじめ、区の男性陣が出で立ちもよろしく、芋煮の盛り分けに大忙しです。この芋煮のお汁は、前日から自治会のご婦人たちが準備し、丹精込めて作られたもので、湯気の立つ大盛りのどんぶりが、次々と集会所のテーブル席に運ばれていきます。さらには、自治会長さんご自慢の「カレーうどん」が絶品で、のどごしもよく、みなさんのお腹を満たしていったようです。

芋煮会には、チーム平・堂根以外に、ボランティアとして継続して薄磯の人々を支援している立教大学から19名の学生さんと先生、それに東北大学からも7名の学生さんが参加していました。学生さんたちは、芋煮作りのお手伝いや配膳をはじめ、集会所でのサロンでは高齢化している平・堂根ボランティアに対してもよくお手伝いくださり、

秋の紅葉巡りを企画して

カリタス石巻ベース 佐藤 光典

石巻ベースでは、今年もオープンスペースを利用している被災者の方々を対象に企画した、秋の遠足イベントを行いました。

「バスで行く秋の紅葉巡りの旅」と称し、10月27日（金）、3人のスタッフを含め、24人での遠足になりました。

前回の6月の遠足「あやめ巡り」の時の大雨とは違い、朝から晴天！暖かく、風もない絶好の紅葉狩り日和となりました。参加者は足取りも軽く、ベースに次々と集まり、予定より10分早い9時50分にスタッフの運転するバスで、いざ目的地の牡鹿半島（コバルトライン）へ出発。

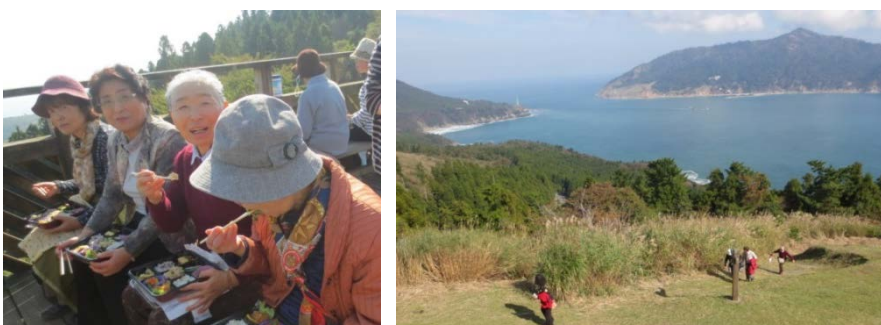
参加者に牡鹿町大原浜出身の方がいらしゃったので、道中のガイドをお願いしました。その場その場での土地の説明や、本人が22歳まで暮らした実家跡の場所、その裏に建っていたある国会議員の実家跡の場所などを小さい頃の思い出話を交えながら説明してくださいました。そのユニークな説明に、皆さんとても喜び、聞き入っていました。



萩の浜での記念撮影

途中、萩の浜で20分ほど休憩。皆さん車を降りられたので、記念写真を撮りました。車中では、参加者の方が司会をしてくださり、歌あり、おもしろトークありで、笑いの絶えない時間を過ごし、牡鹿のれん街で再び休憩。

そして、11時30分、御番所公園に到着し、昼食を含めて1時間の休憩を取りました。公園見晴らし台にて、持参したブルーシートを広げ、風も無く、金華山を眺めながら食べるお弁当に、皆さん大変満足されました。昼食後は、展望台に登り360度の一大パノラマを一望して楽しむ方、周りを散策する方など、それぞれ自然を楽しんでいました。



金華山を眺めながらみんなで美味しいお弁当を食べました

御番所公園を出発し、コバルトラインを通って一番のお目当てである色とりどりの紅葉を見ながら女川へ向かおうとしたところ、たまたまバイクで通りかかった若者二人から、先日の台風の影響で落石があり、コバルトラインが通行止めになっているとの話を聞きました。紅葉を見ながら牡鹿半島一周の予定が、残念、急遽予定を変更し、来た道を渡波（わたのは）まで戻り、女川へと向かいました。



目的の紅葉が見られないことに、みんなが残念がり、車中の雰囲気は少々重くなりましたが、その重い空気を吹き払うようなくじ引き大会がサプライズで始まりました。袋に入った木片に番号が書いてあり、その番号に合った景品がもらえるというゲームは、番号が読み上げられるたびに、歓喜の声が車中に響きわたり、とても盛り上がりしました。

今回のくじ引きの景品とアイデアは、参加者の男性1名、女性4名が、この日のために何週間も前から作り、用意してくださったそうです。その心遣いが、とてもありがたかったです。

14時に女川到着。1時間休憩を取り、女川駅、商店街にてそれぞれ買い物や散策を楽しんだ後、一路ベースへ向けて出発。帰りのバスの中でも歌を歌ったり、くじ引きで当たった景品を見せ合ったり、面白い話で盛り上がり、15時40分に無事、ベースへ到着しました。

今回の遠足イベントにより、普段オープンスペースでは違うテーブルに座り、お互い話す機会がなかった方々が、一台のバスに乗り、歌い、笑い、楽しい時間を共有したことによって、オープンスペースで次に会った時には、自然と挨拶ができる間柄になっていました。いろいろなイベントを企画し、実行するたびに、利用者さん同士の和が広がってきているように感じます。

この遠足を支えてくださった全ての方々、ありがとうございました。



くじ引き大会の景品は、心のこもった手作りの品々